

カナヘビ類の個体の行動などは、野外で観察できることが限られているので、飼育下で観察するほうがよい場合がある。野外で捕獲した雌を産卵させて、孵化データをとるといったことも、一時的な飼育で行う。継続的な飼育によって、個体ごとの性質の違いに気づくこともある。餌の好みや行動の活発さに個体差があることがあり、水槽内で飼育できるとはいえ、限られた空間で複数同居させての長期飼育はむずかしい。しかし、この個体差の観察自体が興味深い。また、飼育下では、野外で生き残ることができる年齢よりも、ずっと長く、10年以上生きる個体があるので、野外で観察されるよりも生理的な寿命は長いことがわかる。ただし、飼育して観察することは、技術と飼育条件（適切な場所と餌補給の態勢）が伴わなければならない。

・まとめとして

生活史が単純なカナヘビ類でさえ、地域の個体群や個体からは、それぞれ独特のデータが得られる。カナヘビ類に限らず、トカゲ類は野外での観察を行い易いので、自分が観察する「MY 個体群」を決めて、調べてみることをお勧めする。よく知っている「MY 個体群」を多くの人が持っていれば、そのことが保護にもつながるであろう。

円山動物園における 北海道産爬虫類両生類の繁殖

本田 直也

[札幌市円山動物園]

円山動物園の爬虫類両生類館では、身近な爬虫類両生類の紹介と市民への啓蒙、そして飼育繁殖技術の確立を目的とし、北海道産在来爬虫類両生類全種を「北海道ゾーン」と公開型バックヤードである「センターラボ」にて飼育展示

を行っている。日本の動物園水族館では、世界的活動として行われている両生類の生息域外保全 A-ARK（両生類の箱船計画）の他に、日本産爬虫類両生類にしぼった AR-ARK（日本産爬虫類両生類の箱船計画）も有志の園館で行われている。その活動の一環として円山動物園では北海道産在来種に関して生息域外保全を進めていくこととし、施設的设计段階から飼育繁殖に関する適切な条件を提供できるよう設備計画を行ってきた。基本的に爬虫類両生類は、それぞれの生息地における季節変動を体感することで繁殖期を迎える。北海道産種においても温度や光周期の変化、冬眠の実施など北海道の気候条件を人為的に提供していくことが必須となる。そのため北海道ゾーンは飼育室全体を断熱材で包み、隣接する他のゾーンの影響を受けることなく、個別に細かい条件設定が可能となるものとした。温度管理は、放射式暖房の他にゾーン内に外気を導入できる装置を設置し、屋外と同じ温度帯を維持できるようにした。冬期においても外気を入れながら暖房を使うことで適切な冬眠温度（3℃～12℃の間）を維持し、飼育個体に対して3～4ヶ月間の冬眠を実施している。また照明とミスト装置（雨）もタイマーと連動されており、光周期は冬期の7時間から夏期の15時間と変動させ、同時にミスト噴射により湿度管理も行っている。このような環境設定により、人為的に繁殖期を誘起させ、ほとんどの種で継続した繁殖が可能となってきた。しかしまだコモチカナヘビ、シロマダラ、キタサンショウウオといった一部の種に関してはまだ発展途上であり、これからもより綿密な調査研究が必要である。今後もこの施設を活用し、飼育技術者の立場から身近な爬虫類両生類の域外保全に取り組んでいくと同時に、身近な爬虫類両生類の魅力が市民へ伝えていきたいと考えている。